

---

# もし明日、君が死んでしまったら

いのり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もし明日、君が死んでしまったら

### 【Nコード】

N9536L

### 【作者名】

いのり

### 【あらすじ】

僕とまゆは恋人同士。でもお互いに受験生だし、会える日だつて限られている。ようやくこじつけたクリスマスの日。僕は少しだけ勇気を出してみた。こんな幸せな日々が、いつまでも続けばいいと思っていた。

## 幸福

駅前の時計を見上げると、時刻は午後九時を過ぎた頃だった。

僕の手は冷たいってさんざん言ったはずなのに、まゆは僕の手を強く握った。

雪がちらついていた。装飾であふれた街は、本当にクリスマスで大歓迎している。そんな姿勢に同調した人々が、寒さに震えながら夜道を歩いている。ここまで楽しいイベントはないだろう。毎日忙しく生きている人たちが織り成す、ひとときの幸せ。そんな中に僕は佇んでいた。

彼女が僕の手を握った一瞬を、僕は一生忘れないだろう。幸せにまみれたような温かな手が、僕の冷え切った手に触れる。まるで火傷してしまったように僕は飛び上がり、しばらくしてまゆを見つめた。

まゆは天使のように笑っていた。

何が楽しいかなんて知らない。でも僕を見つめ返すその瞳は、とても輝いて見えた。少し前の通りにたくさんの人が横切っている。つながれた手を一瞥して目をそらす男性が多数いた。羨ましがられるのもたまには悪くない気がした。

暖かな街頭に照らされながら、まゆはもっと強く手を握ってきた。僕に何かを求めているのだろうか。少し顔を傾けてから、僕は言った。

どうしたの？

彼女が返す。

「さあ、どうしたんだろうね？」

今日、僕は無計画でこの場にいる。クリスマスという吉日と一緒に過ごそうと思っただけで、携帯を手に取っていた。返信はすぐにきて僕は顔をほころばせていた。

さて、これからどうしようかな。

手の暖かみをいつまでも感じていたいけど、それだけじゃデートは成立しない。彼女と僕、二人で笑い合わないといけない。僕はどこに行こうかと周囲を見渡した。

車道の向こう側には駅がある。まゆはここからやってきた。待ち合わせ場所をここにしたのはまゆだ。いつもの場所で会おうね。そうメールが来て僕はここに現れた。まゆよりも早く、それでいて迷惑にならないように三十分くらいの余裕を持って。

ふいに僕の体が傾いた。バランスを保つために歩き出した僕の足は、自然と規則正しい歩調で動いていた。だんだんと駅前から離れていく。僕の左右をいろんな人が通り過ぎる。なんだか警察官が犯人を連行してるみたいだったけど。

まゆが僕の手を掴んだまま歩きだしていた。

駅を離れただけじゃ、いつものデートプランと何ら変わらない。だから、僕は訊いた。

どこいくの？

前を歩く彼女は僕の手を引っ張りながら口にした。

「どこでもいいの。一緒にいるのが嬉しいだけなの」

一緒に歩くって、これじゃなんか僕がまゆの連れ子みたいじゃないか。

「えへへ、それでもいいよ」

それから数十分歩き続けた。しばらく経って彼女は足を止め、振り返った。

「あした、私の誕生日だから、忘れないようにね！」

忘れやしないさ。

今まで生きてきた中で、今日は人生で最高の日。そして明日はまゆにとって最高の日。

そう思えるようにしたいね。

いくつ年をとっても僕からしてみれば通過点でしかない。もう推薦で大学を決めた僕は高校三年生の中では割と楽な位置にいるだろう。それに引き換え、まゆはまだ忙しいというのに、母親が「勉強

しろ」と唾を飛ばす中で待ち合わせ場所に来てくれた。恋人なんだから会いたくなるのは当然なんだけど、それでも今やならきやいけないことは決まっている。それは絶対、僕とのデートではないことくらい知ってる。デートなんて数力月ぶりだけど、耐えきれずメールしたらこうして来てくれたんだ。精一杯、楽しもう。

まゆの手が、僕の髪の毛に触れた。

ちよつとびつくりしたから僕は目をつぶってしまった。

「頭に雪がつもってるよ」

音もなく重さも感じられない雪は、まゆの頭にも乗っかっていた。人のこと言えないだろう。

そう言つて、彼女の長くきれいな髪から雪を落とした。

人通りのない公園の前での出来事だった。

僕もまゆも、これからの予定なんてすっかり忘れていた。

街灯の光に照らされた雪はまるで輝いているようで、僕の目を奪った。息が白い事に気づいたのは、僕の息が荒かったからだろう。気を失いそうなくらい高ぶり、めまいを起こすくらいだった。目の前にいる女の子に僕はどんな気持ちを抱いていたのだろう。

まゆだつて似たような心境かな。

言葉で伝えようとしなくたつて分かるさ。寒いのにどうして僕の手はあつたかくなっているのか、答えは明白だ。僕自身が熱を帯び始めたからだ。まゆの手を暖かいと感じない今、何らかの影響を受けてしまったのだろう。

何らかつて、そんなの本当は分かつた。口にしなくても薄々感じていた。

見つめて見つめ返されて、それ以外の答えがどこにある？

あたりに人は見当たらない。ちよつど街灯の光があたらない場所だし、誰かに見られる心配もない。寒さに震えることもなくなつた。ここから先は僕の役割か。

まゆは、またも僕の手を強く握つてきた。もう離れたくないという気持ちを表しているようで、僕の鼓動は跳ね上がる。なんだか自

分の顔が赤くなっている気もする。

でも、ちよつとした決意をした。

手をつないただけで体の芯まで暖めてくれた彼女にお礼をしようと思う。

さつきから何も喋ってない。ただ見つめあっているだけでやり取りするのは少々危険な気がするけど、これも恋人の特権だ。

まゆは、そつと目を閉じた。

僕はもう酸欠かもしれない。記憶がすべて吹き飛んでしまいそうだ。あれからちょうど一年間付き合ってきてこんな気持ちになったのは初めてだった。いつも笑顔でじゃれあつてまるで友達以上恋人未満といった状況だったのに、今日だけは違った。これが恋人というものなんだと実感した。

まゆが僕の決心を待ちわびている。さつき決意したばつかなのに、僕はためらっている。もし誰かに見られてしまったら、なんて情けないことを考えている。僕はあまり大胆な人間じゃないから、小さなことを気にする。そんな僕の後押しをしてくれるのはいつもまゆだった。付き合い始めたその日から、まゆは僕に優しくしてくれた。どんな時も僕を最優先にしてくれた。

だから僕は今までに感じたすべてを込めて、まゆの気持ちを奪おうとする。

ゆっくりとまゆに顔を近づける。割り込んでくる雪などないに等しかった。全く気にかからなかった。

まゆが目をつぶっていることだけが救いだ。自分でもわかるようににやけた顔を見られたくない。まだ慣れていないから許してほしい。

順番を間違えていた。そう気付いた僕は、脱力していた手をまゆの肩に乗せた。微弱な静電気が発生し、まゆは一瞬びくつとしていた。

あと数センチ。僕がまゆに思いを伝えるまで、あと数秒。

ようやくここまで来たのに、待ちきれなくなつたまゆは勢いよく

僕に抱きついてきた。

でも、無言だった。

どうやら喋れないらしい。いや、僕もだったけど。

初めての感覚におぼれていた。静電気なんて比べ物にならないほどの衝撃が、全身を駆け巡る。まゆは僕よりちよつとだけ背が低いから頑張つて背伸びしている。対して僕は、ちよつとだけかがんで時を過ごしている。さっきまで待ち姿勢だったまゆが飛びついてきたのは予想外だったけど、今は離したくない。その思いが自然に僕の腕を動かし、まゆを抱きしめた。受験勉強なんでものは今日だけ忘れてくれ。

ゆるく吹いた風は、力が弱すぎて二人を離さなかった。ただ、降り続く雪の軌道を少しずつ変えていくだけ。

誰かがここを通り過ぎるまで、二人はそのまま動こうとしなかった。

## 幻惑

誕生日プレゼントは事前に用意していた。

まゆは腕時計をほしがっていて、ピンク色が好きだったから文字盤がピンクできれいなものを選択した。高校生にとってはかなりの出費だったけど、年に一度くらいこういうことがないと、張り合いがない。

まゆと僕は違う学校に通っている。家と家の距離も大きかったため、一緒に通うことはできない。だからこれは、学校を早退してまゆの学校の前まで行って直接渡すことにしよう。そう考えながら、朝早くの通学を楽しんでいた。込み合ってる電車内なのにいつの間にか笑顔がこぼれて前に座っている女性に気味悪がられた。首を振って気持ちの軌道修正をして、なんとか学校までたどり着いた。かばんの中で身をひそめる小さな箱は、結婚指輪を渡す時のようなきつちりした箱に入っていた。わざとそんな感じに渡して、面白おかしくするのもいいかなと思っていた。

授業中も浮かれていた僕は、どうやら幸せ者らしい。そんな僕に気づいた先生がいたずらに指名して黒板の問題を解かせようとするが、すらすらと解いてしまったから見逃してくれた。おそらく先生は、大学行きが決定しているからさぼっているんだろう、とか思っただけのことだ。

本当はいけないんだけど、授業中に机の下で携帯を操作して、まゆに嘘のメールを送っておいた。誕生日を盛り上げるために仕組んだだけのことだ。

『今日さ、七時にいつものところで待ち合わせしない？』

了解の返事はすぐにやってきて、僕はケータイを閉じた。これで準備万端だ。まさかまゆの学校まで遊びに行くなんて思いもしないだろう。先手必勝。今日はちゃんとデートプランも練ってきたし、まかせといてくれ。一人舞い上がっていた僕の顔は、さそかしお



かしかったのだろう。先生はまた僕を指さし、黒板に書いてある問題を解かせた。

そして僕は、おなかが痛いとの仮病をちらつかせ上手く学校から退散した。五時間目の授業が始まる前に、職員室に行って担任に申し出たのだ。どこか疑っている様子だったが、先生はお大事にといつて早退を認めてくれた。僕は職員室から出て先生の視界から外れると、演技を中断して駈け出した。急ぐ必要はないけど、一刻も早くまゆにプレゼントを渡したかった。

まゆはどんな顔をしてくれるのだろう。割とすいている電車で、想像力をフル活用して瞑想する。いろんな喜ぶ顔が浮かんできたが、僕はそれよりも昨日の出来事を思い出してしまいほが赤くなった気がした。普段は冷たい僕の手に体温が伝わって、一分もしたらまるでサウナにいるような勘違いを起こすほどだった。手先までまぶなくいきわたった体温が余計に昨日の出来事を鮮明にさせる。とたんに恥ずかしさが増し、僕は顔を伏せた。

一時間ほどして、まゆの学校がある駅前に到着した。雪こそ降っていないが肌寒い気温に体を震わせながら、学校まで歩くことにした。すでに二時を過ぎてしまった。

途中にあったコンビニで軽食を買った。柔らかなパンをかじりながら歩く。まゆの学校の象徴である白鳥の形をしたピンバッチを付けている学生がちらほら見えた。早めに帰っている学年もあるのだろうと僕は思った。

校門から道路を挟んで向かいにある歩道にあったベンチに腰をおろして、しばらく待つことにした。まだ三年生の授業が終わるには早すぎるだろう。一時間以上待つはめになるが今日は僕がまゆを喜ばせる日だ。彼氏としての役割を果たすために何時間でも待つてやろう。それでも少し寒くなってきた僕は、必死に昨日のこっぴどかしい出来事を思い出し。頬や手が熱をおびていくのを感じながら、縮こまっていた。

僕はもう、何時間ここにいるのだろう。

校門から吐き出されるようにして出ていくたくさんの学生を、一人たりとも見逃すまいとしていたのだけど、一向にまゆが現れる気配がない。すっかり日は傾いて赤々とした夕空が広がっていた。野球部が試合をしている音が聞こえる。キーンと金属バットにはじかれた打球が一瞬、空を横切った。校舎の後ろに運動場があるらしく正確な状況は分らないが、声を張り上げて熱中しているようだった。でも僕は、そんな喧騒を聞きに来たわけじゃない。

次第に校門を通過する人数は減っていき、もう今では部活生しか確認できない。まゆが部活動をしているなんて聞いたことがないからもしかすると見逃してしまったのか。

仕方がないので電話を試みよう携帯を手にとったとき、その携帯が手の中で振動し始めた。

その着信は、まゆからだった。なにか運命的なものを感じてから僕は通話ボタンを押した。

はい、もしもし。

「あの……一之瀬隼人さん、でよろしいでしょうか……？」  
まゆの声ではなかった。やけに大人っぽい女性のような。お姉さんとかかな。

僕がそうですと肯定すると、

「突然ごめんなさいね。わたし、まゆの母親です」

ああ、そうですか。こんな形ですいません。初めまして。

「いえ、いつもまゆがお世話になってます」

そんな、お世話だなんて。

僕はしばらく母親と通話していた。矢継ぎ早に質問をしてくるから、話題を変える隙がなかった。それだけまゆと僕の関係を疑っているのかと思うと少し寒気がした。昨日のことがばれてしまったのだろうか。別にあれくらい世間では日常茶飯事だろうに……。

一瞬のすきを突いて、僕は質問した。  
まゆさんは、家に帰っていますか？

「……」

途端に会話が途切れ、僕は何か悪いことを言ってしまったのだろうか。と会話を思い返した。話題を変えてしまったのがいけなかったのかと首をかしげていると、

「ま、まゆはもう……帰ってきません……」

悲しい時に出すような震えた声で母親は口にした。僕はその意味が理解できなくて、聞き返した。しかし母親からの応答がなく、しばらく小さなノイズだけとなった。徐々に声量を落としながら、もしもと問いかけるとようやく口を開いてくれた。

「ごめんなさい、まゆとはもう……もう……会えません」

……会えないってどういうことですか？ 今日誕生日なんでプレゼント渡したいんですけども。ちよつとまゆさんと代わってもらえませんか？

「できません」

母親はきつぱりと言い切った。

どうしてですか？

「すいませんが、まゆのことはもう忘れていただけませんか？」

真剣な声だ。いつさい誰も寄せ付けまいとするような決意の一言。だけど僕はそんなことで納得するような奴じゃない。

理由を教えてください。何も言わずに消えるなんておかしいです。せめて原因を教えてくださいよ。

そんな僕の問いかけに言葉を詰まらせているようだ。かすかに呼吸を乱しながら鼻をすする音が聞こえた。

「ごめんなさい、忘れてください……お願いします」

まゆさんの口から直接聞かないと納得できません。まゆさんを出してください。

「お願いします。忘れてください！」

大声で叫んだようだ。僕の耳は大音量の母親の声を受け止めきれ

ずに悲鳴を上げていた。

……そんなことで、納得できるか。

まゆさんを出してください！ 僕と別れるはずがないんです！

昨日だって

言いかけて、喉もとで声は詰まっていた。これは言わないほうが賢明だ。

一緒に買物だってしましたし、明日会おうって笑ってましたし、だから

しつこく僕が言及していると、急に母親は叫んてきた。

「もうやめてください！ まゆはもうすぐ亡くなるんです！」

脳にしみていく言葉を僕は認識しきれなかった。

なくなる？ なにが？ やめてほしい？ なにを？

「お昼頃、学校で倒れまして……お医者さんには急性心不全だと言っていました……。生命維持装置を取り付けてくれましたが、もう時間の問題のようです……」

突然の告白に、僕の心はからっぽになった。

「ごめんなさい取り乱しました……もしよかったら」

僕の胸にあるガラス玉のような心が、ひび割れる。

「病院にいますから来てください、嘘か本当か、分かっていただけだと思いますから」

心がきしむ。見えない圧力に、押しつぶされていく。

「……あの、聞いてますか？」

うわの空。奇妙な浮遊感。

明日が見えない。今日の続きはどこに消えてしまったのか。

応答を願っている母親に反応できなかった。口が開いたまま固まってしまった。世の中にあるすべての光景が、色褪せてしまった。

耳にあてていた携帯が滑り落ちてアスファルトに衝突した。寒さに震えることも、あったかいという快感に浸ることもなかった。

涙が出ない。

僕はこのとき、大切な何かを失ってしまった。

## 不信

真っ白な病室では、ベッドに横たわる少女を拘束するかのような器具が様々な場所につけられていた。

口元に、酸素を送り込む専用のマスクみたいなものが付けられていて、そのおかげで何とか少女は生きながらえている。お医者さんは、母親にそんな話を話していたらしい。見れば片方の鼻にも、どこからか伸びた細いホースがついている。

この個室にいるのは少女の両親だけだった。ある程度、少女は僕のことを話していたらしいが、僕と少女の両親が実際に会ったのはこれが初めてだった。

僕がこの病室を開いた瞬間に両親は立ちあがった。少女の母親の目は真っ赤に染まっていた。相当な量の涙を流していたのが一目瞭然だった。僕は病室の端からパイプいすを持ってきて二人の隣に座り、両親同様にただ成り行きを見守っている。お医者さんにもどうにもできないなら一般人が手を貸せるはずがなかった。

「血圧が、どんどん下がってる……」

母親が見つめていたのは彼女ではなく、その隣に置いてある生命情報モニターだった。血圧、心拍数、脈拍……すべてを把握できないが、波打ったグラフが何本もうごめいている。大小様々な数字が表記されており、どうやらこれがゼロになってしまつと……。

目覚まし時計のような耳触りな音を機械が発していた。心拍数が低くなると鳴り始めるらしく、さっきから何度も鳴っては、看護婦さんが音を消している。少し、胸が痛かった。

ふと思ひ出して、僕は母親の行動を説いた。

僕を傷付けないために、忘れてくださいつて電話越しで何度も言つてたんですね？

「そうです。ごめんなさい」

少し前かがみになった母親の顔には生気がなかった。

「隼人君。よかつたら、まゆを最後をまでみとつてはくれないか？」  
一度だって僕と話したことないのに、父親は椅子から立ち上がって僕に頭を下げた。僕と父親の間に挟まって座っている母親が、すごく小さく見えた。

もちろんです。最後まで一緒にしますよ。

僕の一言で頭をあげた父親は、少し笑った。肩の荷が少しだけ下りてくれたようだ。

そのとき、看護婦さんがやってきて少女の体に付いていた器具を次々とはずし始めた。何をするのかと思いきや、空気を送り込むマスキュラだけを残して、僕らのほうを向いた。

「どうぞ、手を握ってあげてください」

それだけ言うと、看護婦さんはその場から消えてしまった。片方の腕から先が布団からはみ出されて、遺族になるであろう両親のために用意されていた。

母親は何かに操られるように少女に近づいて、手を握った。父親は寄り添うようにして母親に近づいては少女の腕をさする。そんな二人の姿を少し後ろで見つめていた僕に、父親が話しかけた。

「隼人君、お願いできるかい？」

手招きされたので僕は立ち上がった。

座り込むにも立っているのもつらそうな格好をしている両親に、僕の隣にあった椅子を持っていた。それに二人とも座った後、その後ろから横たわっている少女を見下ろした。

この病室よりも白い肌だった。最小限の力で血液が循環しているようだった。まだ化粧する必要がない顔は、すべすべしていそうで無意識に手が伸びかけた。妙な衝動を抑えてから、僕は彼女の唇を見ていた。器具で見えにくいけど、あそこだけは確かに潤っていた。  
「隼人くん……まゆの手、握ってあげて……？」

はい。

母親が席を立った。僕は少女の白すぎる手のすぐ隣にいた。いつでも手を伸ばせる状況にいたが、なかなか僕の手は動こうとしない。

今更になつて何を恐れているのかと自分に問いかけた。

「生まれた順に人が亡くなるのなら、君にこんな思いをさせなくて済んだだけどね。本当にすまないね」

微笑む父親。僕も少しだけ、微笑んでみる。

「でもまゆはきつと、隼人君と出会えて幸せだったはずだよ」

そうですか？ 僕は彼女の手も握れない小心者ですよ。

「まゆはそんな君だから好きになったんだ。後悔はないはずだよ」

父親の言葉が、僕の体内に一字一句漏らすことなく浸透する。きつとこの父親もこんな場面に遭遇した経験があるのだろう。慣れているのか、非常に冷静だった。

生命情報モニターからけたたましい音が響いた。それにいち早く気づいた看護婦さんがかけつけて音を消して去っていった。僕はあと何回このデジャビュを目にしなければならぬのだろうか、肩を落とした。

誕生日が命日だなんて、辛いです。

「ははは……その通りだよ。せめて一日でもずれないかなんてちよつとも思つた自分が憎いよ。どうか神様、まゆを返してください……」  
つて最初は願つてただけどね」

力なく作られた父親の笑顔の裏には、とてつもない悲しみが紛れ込んでいる気がした。

ただ無理して気持ちを抑え込んでいるだけで、本心は思いつきり涙を流したい。母親を支える父親の強さなのだろうか。

「そろそろ、まゆの手を握つてあげてくるかい？」

僕はうなずきを返した。

もう一度少女を見ると、まるで白雪姫みたいだなと思った。僕が口づけをすればこの世界に戻ってきてくれるのではないか。しかし、無理やりに器具をはずす勇気を持ち合わせていない。情けなさを実感しながら僕は少女に触ろうとした。

……なぜ、ためらう？

僕の手は、彼女の手数センチ手前から先に進もうとしなかった。突然不動になった僕に声をかけるものはいなかった。僕の心情を察してくれたのだろう。親切心から様子を見てみようとしている。手が震え、足にもそれが伝わった。この手を握ったら、僕は完全に「まゆが死にかけている」という事実を認めなくてはいけなくなる。それが怖かった。倒れた現場を見たわけでも救急車で運ばれる様子を目撃したわけでもサイレンを聞いたわけでもないのに、僕はこの少女をまゆと断定しなくてはいけない。この新雪のように白い手が、昨日の情景を思い出させる。あんな人通りの少ない場所で、いつまでも口づけを続けていたあのとき、あの場所を。思い出を。条件反射で僕の体温があがっていく。少女とは反対に僕の血圧はとても高い。有無を言わず上昇する脈拍を自分で感じる。暖房が効いていて暖かいとだけ思っていたのだが、今は暑いと言い切れる。僕は上着を一枚脱ぎ、今一度少女の手に手を伸ばした。

少女に触れた瞬間、僕の手ひらはありえない現象を感じとっていた。いくら思い出を振り返っても振り返っても変わらない感覚。僕の手は、少女から離れようとしなかった。

「どうしたんだい？」

啞然としている僕に、隣に座る父親が心配そうに声をかけた。

僕は大変な事実気づいて言葉を失っていた。少女がただの少女であるという確実な証拠をつかんだのだ。だから僕は笑顔になった。未来を瞬時にキャッチした。勝手に明日という光をさえぎっていただけだ。とんだ思い違いをしていた。

安心した僕は父親に言った。

まゆさん、まだ死にはしませんよ。

「な、何を言うんだ？」

言葉通りですよ。まゆさんはまだ死んだりしません。

「えっ、えっ、どうということなの？」

立ったままだった母親が、僕の発言に困惑していた。



僕は知ってますよ。この人はまゆさんではありません。

「何を言っているんだ……？　少し落ち着きなさい隼人君。辛いのは分かる。でもな……」

じゃあ、この手に触れてみてくださいよ。

僕は、握っていた手を離した。そして少女の手を触るように促した。

不思議そうな表情で少女の手を握った父親は、ため息をついた。

「まゆの手だ、間違いない」

いいえ、それは間違いですよ。

「どういうことだ？」

まゆさんの手は、こんなに冷たくなかったです。これはまゆさんではありません。どこかのだれかさんです。何かの手違いでここに来てしまったのでしょうか。さあ、本当のまゆさんを探しましょう！  
父親は僕の肩に手を置いた。

「落ち着きなさい。そう思いたい気持は分かるが、制服やら何やら間違いなくまゆだ」

僕は信じなくなかったから、否定する。

いいえ、これはまゆさんではありません。見ず知らずの少女です。

「だ、だからな……」

父親は、僕が自暴自棄になっているとも思っているのか、頭を抱え出した。

そこまで言うんだったら、証明してあげますよ。

「証明……？」

僕の後ろ側にいた母親が気の抜けた声を出す。

ええ、まゆさんをお二人の前に連れて来て見せましょう。必ずです。

「……………」

両親ともに何も言わなかった。隣にいる父親は、心配そうな顔を崩さない。僕に向かって憐れむかのような目線をくれる。でも僕は知っている。まゆの手は、僕を暖めてくれたまゆの手は、こんなに

冷たくなんかない。もっと温もりと愛情と優しさであふれていて、冷たくなった手をありえないくらい高温にしてしまう。人の深層心理にまで浸透し、全身を愛ある温もりで包み込んでしまう。

こんな冷たい手が、まゆのはずがない。

僕は本当のまゆを見つけるため、病室から立ち去った。

## 搜索

学校に行く時間さえもつたない。僕は次の日、学校を休んだ。

まゆは今、どこかで何かに脅えている。僕が想像するにまゆは両親から受けた精神的な圧力で家を飛び出したんだ。勉強勉強うるさい母親から逃げようとしていたんだ。僕が必ず探し出して精一杯抱きしめてあげるから、待っていてくれ。

僕はいつものように制服を着て家を出た。もちろん学校に向かうはずがない。僕にはまゆを探し出すという使命があるからだ。さすがのまゆだってこんな寒い時期に外に放り出されて可哀想だ。わざとじゃないとはいえ、母親はまゆを精神的に追い詰めた。許したくなかったけど悪気があったわけじゃない。まゆを見つけてそれから解決するでしょう。

僕はカラのかばんを背負って電車を乗り継ぎ、とある駅に到着した。

ここは何度か来たことがある。昨日もここを通ったけど。

まゆの家から一番近くにある駅だった。ここから十分ほど歩けばまゆの家に着く。三十分ほど歩けば昨日の病院にたどり着く。でも病院に用はない。昨日あの病室で横たわっていたのはまゆじゃない。たまたま迷い込んだ少女なのだ。そうやって身代わりを作ること。まゆは自分が死んだと知人に報告し、姿を消そうとしている。間違いない、これが答えだ。まゆは今、どこかで僕の助けを待っている。幸い、この周辺地域は昨日も今日も快晴だ。雪解け水が排水溝に流れ込んだりしているけどまゆはきっと生きている。そう信じている。僕はまゆの家に向かってまっすぐに歩き出した。

庭付き二階建ての一軒家に到着した僕は、一度その家を見上げてからインターフォンを鳴らした。

ピンポンと間の抜けた音が室内に響いたようだ。ドタドタと足音が近づいてきて扉を開け放った。

母親が僕を見て驚愕していた。

「ど、どうしたの……？ 学校は？」

まゆさんを探しています。ちょっと娘さんの部屋を見せていただけませんか？

そう告げてからしばし沈思していた母親は、

「……それは駄目よ。たとえ彼氏さんでも了承もなしに部屋に入るのはいけないと思うわ」

首を振って断った。

じゃあ、せめて見せてもらいたいものがあるんですけど。

「何を、見たいの？」

まゆさんの日記です。いつも大事そうに持ち歩いてるやつなんでおそらく通学用の鞆に入っていると思うんです。お願いできませんか？

「……」

なにを迷っているのか母親は目を泳がせてから、ちょっと待ってねと僕を外に立たせたまま二階への階段を駆け上がった。まゆを探してきてあげるというのに、なにを躊躇しているんだろう。理解できずに立ちつくしていると、もう一度扉が開かれた。

「これ……かしら？」

その日記は、大きな向日葵が表紙を飾っていた。いつでも太陽を指している向上心が大好きなんだとまゆは言っていた。デート中、自慢げに見せてくれたから中身を覗いてみようと思いたが、瞬間的に奪われた。そんな思い出のある一冊だ。

はい、これです。お借りしてよろしいでしょうか？

「いいわよ。いいんだけど、あのね隼人くん……」

必ずまゆさんを連れて帰ります。もうしばらく待っていてください。

母親は僕に何か言おうとしていたが、僕の声を聞くとなぜか口を閉ざしてしまった。

では、失礼します。

僕は日記を手にして駅へ戻ることにした。

把握しなければならぬ期間は約一年間。日記なら本心が書いているはずだから、普段人に言えないような思いも綴られているだろう。それより前の日記はあまり見たくなかった。僕とは無関係な幸せが書かれているはずだから。

この日記はさきおとこのクリスマススイヴで途切れていた。そこから一枚一枚ページをめくっていき、一年前のクリスマススイヴまでさかのぼった。ちょうどページの左上に一年前の日記文があつて、僕は安堵した。

そこにはこう記されていた。

『告白します。ずっとため込んでいたものをぶつけてきます。きつと明日からから幸せがいつぱいです！』

本当にまゆの性格を反映したはきはきとした一文だった。思わず口元がゆるむ。

それから数日後の日記。

『うーん、告白は成功したけどなんだかイマイチ。もっと積極的にいかない！』

OKをしたけど、僕は小心者だからとまどっていたんだ。今でも鮮明に覚えている。

そうやって長い間まゆの日記を読みふけていた。一度読んだだけで記憶できるくらいしつかりと目に焼き付ける。当てもなく電車に揺られながら一時間ほど座りっぱなしだった。通勤ラッシュを终えた電車内で、学生服を着ている人間は僕一人だけだった。そして一度読み切ったところで、気になる記述があるページを読み返した。まずは、お互い三年生になったばかりの四月中旬の日記文だ。

『東京デイズニerlandに遊びに行きます。あ、もちろん隼人君と一緒に。いや、隼人君と二人きりで。えへへ、幸せ。世界が終ってもいいくらい！……やっぱやだ。まだ世界が終ってほしくない。だってまた一緒にデイズニerlandに遊びに行きたいから』

僕は付箋代わりにそのページの左上を三角形に折った。

幸せだった瞬間が蘇る。

あのとき僕も思った。もう一度行きたいって。

そうか、分かったぞ！

僕の目的地が決定した。

二時間以上も電車に乗っていた。駅を降りてすぐ見えてくる光景はあのときと違った。

平日だからだろうか。デイズニールランドは閑散としていた。入場口にちらほらと寄り添っているカップルを目にするけど、ジェットコースタから悲鳴は聞こえないし、休日とは違った空間があった。僕がまゆと訪れた時は休日だったから人々でごった返していた。平日の遊園地というのはこんなものなのかとため息をついた。

窓口で入場チケットだけを買った中に入った。乗り物に乗るつもりはなかった。僕は遊びに来たんじゃないくて、まゆを助けに来たんだ。心を痛めて悲しんでいるから、その感情を楽しさで打ち消しているんじゃないかと推理した。どんなことがあっても明るい性格だったから、きつと、そうだ。

確か初めてここに来た時は、人が多すぎてどのアトラクションにも乗ることができず、いきなりご飯を食べたはずだ。だから飲食店に向かった。

ここはもつと人が少なかった。吹き抜けのように高い天井にいくつもシャンデリアが飾っており、室内の中央にある横長のテーブルには、自由に取っていいバイキング形式の飲食物が置かれていた。とにかく懐かしかった。何も変わらない情景が今ここにあった。

野菜が苦手、なんて子供っぽいことを言う僕に対して、まるで母親のように軽く叱りつけてちよつとだけ食べさせられたつけ。やっぱりおいしくなかったけど、今となってはいい思い出だ。そう思っ  
て僕は目を細めた。

でも残念ながらここにまゆはいないな。

次に向かったのは確かコーヒーカップだったかな。

遊園地の敷地がやたら広がったので迷ったが、僕はコーヒーカップを見つけ出した。

ひと組のカップルがぐるぐるとまわり、二人で中央の円盤を勢いよくまわしては、きゃーと声をあげていた。

僕もやったなあ、あんなこと。

そう思ってたあたりを見渡すが、そこにまゆの姿は見られない。

仕方ない。次の場所に向かうか。

僕はまゆとまわった順に敷地内を移動していた。こんなに歩いたのは久しぶりだった。周囲に目を配って懸命に探す、まゆの姿は確認できなかった。いつの間にか真っ赤な夕日が観覧車の背後に張り付いていることに気づき、今日はもうあきらめて家に帰ることに決めた。

ここじゃ、なかったみたいだ。

まゆは僕の迎えを待っている。

寒さで自分自身を抱きしめながら、誰かに抱き締められるのを待っているはずだ。あまり日をまたいではいけない。一刻も早く探し出さなくては、今度こそ本当にまゆは冷たくなってしまう。あの柔らかな手を、僕自身の手で守るんだ。

どこにしようと僕はまゆを見つけ出す。

僕たちは恋人だろう？ 以心伝心だろう？

ふがいない彼氏でごめん。もう少し……もう少しだけ、生きながらえてくれよ、まゆ。

夜、家に帰ってきた僕に、親がさぼった理由を問いただしたけど、説明する暇さえもつたない。だから無視して部屋に閉じこもり日記に目線を落としていた。

八月上旬の日記にはこう綴られていた。

『きれいなきれいな花火大会！ もちろん噂のあの人と二人きり行ってきます！ かなり順調ですよ！ ありがとう神様！ まだまだ

隼人君は遠くにいる気がするけど、浴衣姿で花火を見上げながら、もつともつと近づくぞ！」

行ったなあ、花火大会。遊園地に負けず劣らず人が多くて暑苦しかったけど、あんなにまゆと密着できたのは嬉しかった。海岸線から望む花火玉は、オタマジャクシみたいな形をして船から空高くへと舞い上がり、ドンと大きな音を響かせて何度も花を咲かせた。周囲の喧騒であまり声が聞こえなくて、何か伝えたとき、まゆは僕の耳元で囁くように話しかけてくれた。

恥ずかしくていつまでも七色の花火を見つめていた僕の腕にしがみついてきたっけ。僕は凍ってしまったように動けなくなった。大胆不敵なまゆに恋心を抱いた瞬間でもあった。いままでなんとなく付き合ってきたけど、本気で僕のことを好きなんだなと感じた。飛び上がってバンザイしたいくらいだったけど、僕はやっぱり固まっていた。

一パックしか買っていないたこ焼きと一緒に食べながら短い花火大会は終わった。それでもすぐには砂浜から立ち上がれなかった。また腕に手を絡めてきたうえ、今度は顔を寄せてきた。全身が緊張していて喋ることさえままならなかった。

ほとんど人がいなくなつてから僕は立ち上がった。

行けるところまで一緒に帰ろうと言つて僕は歩き出した。まゆは腕にひつついているから僕の顔はこわばっていたと思う。駅が近くなるとまゆは足を止めて、こう口にした。

「……まだ、帰りたくない」

僕はその言葉の意味を理解していなかった。恋愛にうとかったからだ。

親が心配するよ、時間も時間だしまた明日にしようよ。

「……………」

うつむいたままのまゆを僕は少し上から見つめていた。突然反応がなくなつたから心配していた。

だけど次の瞬間、笑顔に切り替わつたまゆの顔が僕の瞳に映りこ



なんだ。

「そうだねっ！ 明日があるもんね！」

まゆの気持ちを受け止める勇気がなかったんじゃない。まだ、その気持ちに気付けなかったんだ。僕はまゆに対して警戒心を持っていたから。

……そういえば。

僕は机の引き出しを開けて中をまさぐった。

取り出したのはまゆから渡されていた一枚のチラシ。へえ、こんなものがあるんだと僕は驚いていた。夏のイベントだとばかり思っていた花火が、新年早々打ち上げられるという。

新年を祝う冬花火だ。

これに行くか否か相談していなかったけど、もしかするとこれに行きたかったんじゃないのか？ 好きな人と初詣やお祭りに出向きたい。僕も同感だ。できれば新年は年賀状だけじゃなくて直接会ってどこかで遊び、忘れられない一日をたくさん作り上げたいもんな。一月一日になると同時にあの時と同じ海岸線で花火が打ちあがる。もう行くしかないな。

理由はないけど、この花火大会にまゆは来てくれる気がした。チラシを握りしめながら僕は一人うなずいていた。

まゆ……まゆ……まゆ……。

もうすぐ逢いに行くから、待っていてくれ。

僕は知ってるよ。誰がどんな批判を並べようと君はまだこの世界で生き続けているって。涙を流しながら僕の助けを待っているって。もう過去を振り向かないよ。君をここまで追い詰めた原因の一端は僕にあるはずだ。君の気持ちを何度も無視してきた僕がいけないんだ。この日記を目にして本当に大切なものに気づいた。ようやくすべてを受け止める準備が整った。あと数日で捕まえてあげるから待っていてくれ。

突然、ポケットに入っていた携帯が振動した。取り出すと、誰かの電話番号が表示された。

僕の知らない誰かからの連絡だ。

非通知じゃないから出てみようか。

通話ボタンを押すと、とある人物の声が聞こえた。

「隼人か……？」

たくましい男の声だった。僕の名前を言ったから知っている人だろうか。

どちら様ですか？

「どちらじゃねーよ。大樹だ」

それは僕のクラスメイトである大樹からの電話だった。

何の用だよ？

「お前さ、学校来ないのかよ？ メールしても全然反応ないしどうしたんだ？」

別に。皮肉にも学校やめるかもしれない。

「は！？ 何考えてんの？ もうすぐ卒業だぞ？ お前もう大学推薦で通ってるのに最後まで高校通って卒業しなかったら取り消しになるかもしれないんだぞ？」

いいよ、それでも。

十秒ほど会話が途切れて、大樹は告げる。

「……悪い、お前が休んでる理由知ってたよ俺。なかなか電話できなかったのはそのせいなんだけどよ。……なあ、まゆのことだろう？」

大樹は申し訳なさそうに小さな声で言った。

だったらなんだ、僕の勝手だろう。

「勝手じゃねえよ。お前を心配してやってんだよ。おい、大丈夫かお前？」

ああ、お前に心配される義理はない。だってお前は僕のことを嫌いだろう？

「まだそんなこと言ってんのかよ。それは勘違いだってさんざん言っただろう？」

だったらどうしてまゆの情報を持ってたんだよ？

「昔は俺と付き合ってたんだぞ？ 電話来ても不思議はないだろう？」

大樹は絶対に僕のことを嫌っている。まゆから告白を受ける前は、大樹と付き合っていたんだ。彼女を取られて恨みを持たない人間がこの世にいるものか。

僕が大樹の立場だったら、大樹を殺しかねないよ。

「それはお前の場合だろう。俺はお前と違うんだよ」

もういいよ、切っていい？

「ま、待てって！ 聞きたいことがあるんだよ！」

慌てて声を張り上げ、大樹は僕に待ったをかけた。

なに？ 忙しいから手短かに頼むよ。

「まゆがまだ生きてると思ってるんだろ……？」

数秒前とは打って変って緊張感を醸し出す大樹の声。僕は淡々と口にした。

ああ、生きてるよ。僕が救いに行くんだ。

「おい、お前大丈夫か？」

だから何がだよ？

「まゆの両親が心配してたぞ。お前の行動がおかしいって、彼氏が彼女を助けちゃいけないってのか？」

「違う。まゆはもう死んだんだ」

僕の周りにいる人たちは一人残らず汚れている。眠りについていた少女の顔を見ただけでまゆと決めつけるのはあまりにも軽薄すぎる。昼ドラみたいなロドロの世界で生きていて恨みを買いまくってる人の家族ならそんな感じでいいけど、まゆは違う。僕と同じ世界で生きて、僕と人生を共にする運命なんだ。まゆがこんな簡単にいなくなってしまうはずがない。

僕はお前が嫌いだ。

そう言って携帯を閉じた。また電話がかかってくるかと思ったが諦めてくれたらしい。もう話したいことなんてなかったし都合だ。みんな騙されてる。絶対に探し出してあの鈍感な家族の前に現れて

やる。真実を突き付けてやる。

ちよつとだけめまいがして、僕はベッドに横になった。

一分もしないうちに意識を失い、電気すら消し忘れて眠りについてしまった。

僕は次の日の部活動を休むことにした。

## 約束

一月一日までの数日間は、日記に見逃している個所がないか徹底的に調査して、その場所にまゆを求めて足を運んだ。僕が朝早く家を出ようとすると、親が睨むような目線をよこしたけど、何をされようと今の僕を変えられやしない。最優先事項はまゆを連れ戻すこと。もし見つかってもう家に戻りたくないと言ったら、僕はためらいなく学校をやめてまゆとどこか遠くに行こう。汚れた世界の果てに少しくらいオアシスはある。それを求めて一緒に世界を旅するんだ。いつまでも二人きりで。

僕は毎日、制服姿で朝早くから夜遅くまで外を出歩いていた。存外、まゆは近くにいないんじゃないか。僕を後ろからつけていたりしてちよつとした興奮を楽しんでいるって可能性も捨てきれない。一定時間をおいて、街中を歩きながら振り返ってみる。でもそこにあるのは見ず知らずの人間ばかりで、変な顔をして一瞥されることがほとんどだった。くじけそうになることもあったが、たまに視界に入る幸せそうなカップルを目にすることで気を持ち直した。またあやうって僕を温めてくれる日が来ると思うと全身が熱くなる。今日も変わらず冷たい手が少しだけ熱を帯びた。僕はクリスマスの日握ってくれた片方の手を握りしめ、傷つけないためそつとポケットにしまった。

まゆの日記には日々の悦楽が綴られている。でもそれはどのページもその日の出来事には触れず、まゆは自分を奮い立たせるために書いているようだ。それに気づいたのはすべての日記が一日ずれて書いてあったからだ。つまりまゆは、次の日にしたいことを前日に書き込んで決心を固めていた。明日に向かって進もうとするまゆらしい日記の使い方だ。その日の感想が一文もないことが何よりの証拠だろう。僕はまゆの明るい性格をもっと知れて嬉しかった。

ただ、どこを探してもまゆは見つからなかった。

僕の目が悪いのかと擦ってみるけど相変わらずの景色が広がっている。一緒に買い物に来た商店街の入り口を目にし続けていた。その中をさんざん探索するものの、なにも成果をあげられず夕日を横目に家へと帰った。

寂しいけど、まるでまゆと鬼ごっこをしているみたいだ。僕がいづもまゆに会えないのはまゆが一枚上手だからだろう。僕が訪れる直前に次の場所に向かってしまう。だから見つけれない。心の中では見つけてほしいと思っているのに、勝手に消えてしまったのだから後ろめたいはずだ。でも安心してよ。僕はこの鬼ごっこを終わらせる方法を頭の中に思い描いている。日記に書かれている所を順々に訪れても意味がないのかも、と思ったことが発端で生まれた策。僕がしなければならぬのはまゆの思いを先取りすることだ。日記外にある本当の気持ちを察すれば必ず道が開ける。

早目に家に帰ってみると、親に腕を引つ張られリビングに連行された。そこには担任の先生がいて、座布団の上に正座し紅茶をすすっていた。僕がさぼる理由を知らない先生は優しい声で僕に話しかける。悩んでることがあるなら言いなさい、聞いてあげるからと親切に対応しようとしていた。僕はリビングの扉近くで立ったまま、大丈夫ですと伝えた。年が明けたらさぼらず学校に向かいますと言っておいた。約束だよ？ と口にした先生は、

「何か困ったことがあったら何でも言ってね」

と続けて帰っていった。家を出ようとする先生を玄関で見送った後、部屋にこもった。

やることが見つからなくて、僕はベッドに倒れこむとすぐに眠ってしまったらしい。

十二月三十一日の夕方。

僕は厚着してジャンパーを羽織って家を出ようとした。

玄関に駆けつけた親にどこ行くのと尋ねられたが、僕は答えなか

った。どうせ僕の考えに賛同してくれないと思った。ちょっと遅くなるよと親の顔を見ずに口にして扉を開いた。

沈みゆく楕円形の夕日が西空に浮かんでいた。僕の足元からは、細長い影が伸びてもう一人の自分が地面に張り付いていた。いつまでもそばにいる存在は、ちっぽけな影じゃなくまゆであってほしいと願うのみだった。

電車を乗り継いで一時間弱。すっかり日が落ちて辺りでは街灯が点滅し始めていた。

僕がたどり着いたのは、日記に書かれていたのと同じ場所であり、それでいてまゆの心を先読みした場所。八月上旬に訪れた花火大会、海岸線近くの駅だった。

まゆは今日、必ずここに来てくれる。潮の香りが漂いなんとも感慨深い。その潮の香りに導かれるように大通りを歩き出した。ちらほらと着物を着た女性が目に入り、昔を思い出させてくれた。寒さゆえか歩く人々はみんな動きが鈍く、僕は何組ものカップルを抜かして足早に砂浜へと向かった。

すくい取ると小さな手の隙間からさらさらと滑り落ちるような砂を踏みしめながら、波打ち際を永遠と歩き続けた。

まゆはもう来ているかもしれない。内側の車道に街灯はあるものの、暗闇に包まれているこの砂浜で一人の人間を探すのは困難を極める。冬場なのにとこで買ってきたのか花火セットで遊んでいる子供がいたが、その光は弱すぎて当てにならない。早めに捕まえて一緒に花火を見上げようと思った。

まさか今日ここに来てるなんて夢にも思っていないだろう。後ろから声をかけて振り返るまゆの顔を想像しながら、足場の悪い砂浜を歩く。砂浜は長さ一キロメートルほどあり、僕は何度も往復して目を光らせていた。しかし全然見つかる気配がなく、徐々に人が増え始めて真っすぐ歩けない状態になってしまった。新年の幕開けとともに冬花火を満喫しに来た人々は、思い思いに語らいながら砂浜に腰をおろして待っている。男性の大半は普段着だが、やはり女性

は着物が多かった。もしかするとまゆも着物姿でここにきているのかなと今一度、探しなおすことにした。

砂場は人で埋まってしまった。もう身動きが取れなくなった僕は仕方なく車道に続く階段を上り、少し高い場所から全体を見渡してみた。夏の花火大会とほぼ同じくらいの人数がいて、とても一人の人間を探せる状況じゃなかった。

歩道橋の端っことで、ため息をついて座り込んだ。ここまで人が多いたとは予想だにしていなかった。大型のコンサート会場みたいに人が埋まっていて、尚且つ後ろ姿しか見えないために、もうみんなまゆに思えてきた。

どうしようかと迷った時、ふいに手がポケットに触れて携帯の存在を思い出した。

全然活用してなかったけど、まゆが出てくれるかもしれない。僕の連絡を待ちわびているのかも感じて手に取った。

僕はまゆに告白された当時、ほかにつき合っている人がいるなんて知らなかった。しかもそれが友人の大樹だなんて嘘だと思っていた。大樹は特に悔んでいる様子もなく、僕に向かって「まゆをよろしく」と電話口で言っていた。僕はその言葉が信じられなくて大樹の携帯番号を削除していた。優しい言葉をかけてくれたのは、何かの裏返しなんだと決めつけて。

過去の回想をしていると、手の中におさまっていた携帯が振動した。

僕はあわてて立ち上がる。しかもメールではなく電話のようだ。

開いてみると僕はとんでもない画面を目に焼き付けていた。通話開始ボタンを押すのも忘れてしまうほど予想外の出来事に、見間違いないかと思を疑った。

でもそれは、僕が求めている相手からの電話だった。

急いで通話ボタンを押して携帯を耳にあてがった。

……も、もしも。

しばらく返答がなく、誰かのいたずらかと落胆しかけた。



しかし、

「えと、ちよつといいかな……隼人君？」

かわいらしいまゆの声だった。まゆが僕に連絡をくれたのだ。

ね、ねえ、今どこにいるの？ 花火大会来てる？

またしばらく途切れる会話。砂浜に集まっている人たちの声がうるさかったので、携帯を耳に押し付けた。

呼吸する音だけが聞こえて、また返事があった。

「明日……明日……会いたいんだけど、いいかな？」

明日？ どこで？

「夕方くらいに……いつもの場所で、待ってるわ」

うん！ 分かった！ 必ず行くよ！

「ありがとう。じゃあね」

プツンと音がしてまゆは消えてしまった。

やっぱりまゆは生きていた。僕の推論は正しかったのだ。誰もが僕を悲観する中で、一人諦めなかった僕だけが真実を手に入れた。まわりにいた誰もが間違いで僕だけが正解への扉を叩ける。察するにこの花火大会には来ていないのだろう。でもまゆがくれた細く長い一本の赤い糸はまだ切れていなかったようだ。よし、明日早起きしてまゆを待ち構えよう。

僕は駅へと引き返す。

そのとき背後でヒュルルルと音がして、大きな花火が空に舞った。その光が僕のところまで届き、斜め下の地面にかすかな影を作り出す。何発も上がっていくので何度も影が現れる。駅に一步步近づくたびに濃くなっていく影。それがなぜかまゆのような存在に思えた。地面を踏み込むたびにまゆに近づいていくようで、僕は笑顔になった。そうだ、明日は再会記念日にしようか。

僕は決して笑顔を絶やさずに一日を過ごした。

## 友人

いつもの場所で。

これが僕とまゆの合言葉だった。ほとんど計画も立てずに漫然とデートを重ねる中で、唯一決まっていた「いつもの場所」。それはあの駅前だった。クリスマス当日に僕の手を温めてくれたときの笑顔を再び見ることができる。上機嫌になった僕はその駅前にお昼頃向かってしまった。

季節外れのぽかぽか陽気だった。すでにクリスマスの装飾は取り外されて人通りも少なかった。元旦だからほとんどの人は家でのんびりしているのだろう。乗ってきた電車もやけに人が少なかった。早く来すぎているのは自覚しているから、駅ビルのファーストフード店で休憩がてら待ってみることにした。

ちょうど窓から駅前を見渡せる四人席を一人で陣取って昼食にありついた。店内のお客さんは少なく、店員さんも今日は手が空いているようだ。スパゲッティを注文し、それが席に運ばれてくるまでずっと窓から外を覗いていた。

相変わらず人も車も少ない。こんな場所だからまゆがくればすぐに見分けられる。平日の遊園地よりももっとすいている駅前をちらちら気にしながら、僕はスパゲッティを口に運んでいた。

全部食べ終わってもまだ数時間の余裕があった。そのままぼーっと外を見つめ続けたけど、店内が閑散としているせいか店員さんは僕を追い出そうとしなかった。むしろ頼んでもいないのにドリンクバーのお代わりを入れてくれようと声をかけてくれたくらいで。相当、暇を持て余している様子だ。その申し出を断って、自分でお代わりを入れてから席に戻った。

持ってきたバッグの中には渡しそびれた腕時計が、今か今かと出番を待ちわびている。驚かせてやろうと思って、まゆの学校まで出向いたときに持ってきていた真正正銘のプレゼントだ。こうやって

まゆの手に渡る日が来たことを感謝している。神様と、諦めなかった自分に。

ふとまぶたが重くなり、視界が黒く染まった。不覚にも僕は疲れているようだ。満腹感からか、大きなあくびをしてしまった。

くそ、もうすぐまゆがここに来るっていつのにどうして眠いのだろう。昨日もきちんと寝たはずなのにどうして……。

思考の渦に巻き込まれていくにつれて僕の眠気は増幅される。

うつらうつらと首が力を失いかけていた。もうまぶたは開けない。暗闇から脱出できない。

ちよつとだけ、ちよつとだけ休もう。

こんなところで寝てしまえばさすがに店員さんが起こしてくれるだろう。

そう思った僕はテーブルの上で手を組んでそこに額を当てた。

夢の世界に吸い込まれていく。

笑顔でまゆと会ったため僕は静かに寝息を立てていた。

「お客さん、起きてください」

その声をかけられて僕は目を覚ました。

「ご気分はいかがですか？」

目を細めて心配そうな顔をする店員さん。どうしてそんなことを聞くのだろう。おぼろげな記憶を手繰り寄せながら背伸びをした。

お代わりしたコーヒ―はすっかり冷めてしまった。

大丈夫です。すいませんなんか。

「いえいえ、今日はお客さんも少なかったので大丈夫ですよ」

笑顔を作った店員さんに会釈をした。ふと眩しい外に目をやった。オレンジ色の太陽が外に輝いて……。

あっ！

約束の夕方が来てしまった。腕時計をみると、すでに五時を回っていた。

店員さんの親切が裏目に出てしまったようだ。

僕が急いで立ち上がり会計を済ませて店を飛び出した。一気にエスケーターを駆け下りて駅前に足を運んだ。

少し寒くなってきた。上着を持って来ていなかった僕は、自分を抱きしめるようにして腕をさすっていた。

多少の人通りがあつたが待ち合わせしているような人影はない。駅前に隠れるような場所は見当たらないので間違いないだろう。一通り確認すると、いやな予感が脳裏をよぎった。

来るのが遅かったんじゃないだろうか。僕がなかなか現れなかったからまゆは諦めてどこか遠くに移動してしまったんじゃないか。また僕はまゆに追いつけなかった。せつかく追いつくチャンスをもたらしたのに僕は居眠りしてしまったからすべてを棒に振り、最悪の結果を招いてしまった。

そう肩を落としていた僕の視線に入ってきた人物は、まっすぐに僕へと歩みよつてきて目の前で停止した。

僕はなぜ彼がここにいいのか分からなかった。一直線に僕を捉えながら立ちどまっている彼は、まるで久しぶりに会った旧友のように微笑んだ。

大樹、どうしてお前がここにいる？

「ああ、まあ……謝らなくちゃいけないと思つてな」

端正な顔をわざと崩しているように見えた。大樹は僕に頭を下げてきた。

「ごめん、まゆはここにはいないよ」

……どうということだ？

「まゆはこんなところにはいない。もっとほかの場所にいるんだよ。俺はそれに気がついたんだ」

大樹の言っている意味は理解しかねるが、明るめその声に少し期待が持てた。

もしかしてお前、まゆがどこにいるのか知ってるんじゃないか？  
大樹は顔をあげて指先で前髪を整えた。

「ああ、今からそこに連れてってやるよ」

本当か？

「もし嘘だったら俺を殺せばいいさ。ついてこい」

よほど自信があるのか胸を張ってそう言い切った。

勝手に駅構内に歩き出した大樹の後ろに僕は付いていった。大樹の行きつく先にまゆがいる。確かなのはそれだけだ。聞きたいことは山ほどあるけど今はまゆと会うほうが先決だ。はやく再会して抱きしめてあげないと。

人がまばらに乗車している電車で揺られ、向かいの景色を眺めながら、僕は高ぶる気持ちを抑え込んでまゆの元へと導かれていた。

## 回帰（前書き）

まるまる一章分抜け落ちていたので修正しました。  
次章が「回想」になります。

## 回帰

……おい大樹、ここになにがあるってんだ？

「馬鹿言うな。せっかく無理言って借りたんだ。ちゃんと見ろ」

僕が連れてこられたのは、いつの日か少女が横になっていたあの病室だった。

大樹が看護婦さんに事情を話して通してもらったのだという。運よく空き部屋で。

すっかり日が暮れてしまった。外は群青色に染まり、マフラーをして歩いている人が多くなっていた。僕は明かりのついた室内で大樹に指示されていた。

「まゆはな、このベッドで静かに息を引き取ったんだ。本当に幸せそうな顔をしてな」

結局、お前も僕のいうこと信じてないんだろ？ もう帰るわ。まゆが約束の場所で待ってるかもしれないんでな。

僕が扉に手をかけると、大樹の声が後ろから飛んできた。

「待て、隼人！」

扉を開いた手が動かなくなった。早くあの場所に戻らなくてはいけないのに。

お前も僕の言ってることなんて信じてくれないんだろ。

「俺は信じてるぞ。お前の言うとおりで。まゆは死んでない」

振り返って僕は、大樹を睨んだ。

なんだその矛盾は！ 馬鹿にしてんだろ！ 僕を馬鹿にしてんだろ！

歯を食いしばった僕に大樹は小さな声で告げた。

「ちよっと、トイレ行って来い」

……は？

「頭冷やしてこいって言うてんだ。いいからトイレ行ってこい」

口にしてることが無茶苦茶だ。大樹は自分を見失っているのだから

うか。少しも僕の顔から目線はずさなかったから、ムカついて病室を出て行ってやった。

病院だから様々な人がいる。僕の求めていないどうでもいい人間が多数いる。足音を響かせながら廊下を歩いているといろんな人とすれ違う。看護婦さんが僕の横を通過する際、会釈してくれた。何かを感じて振り返ると、その後ろ姿はあのととき病室で「手を握ってあげてください」と言ってくれた人だった。僕があのとときいた人間だと気づいてはいないらしくそのままナースステーションに入っていた。ため息をついた僕はトイレに向かった。

静かな場所だった。数個の便器と洗面所が並んでいる。尿意があったわけじゃないので洗面台に両手をついて下を向き、休憩をとっていた。薄暗く青白い室内にため息が響く。誰もいないうえ狭いから孤独感が増していく。やっぱり帰ろうか。なぜか思い返して大樹の言葉通りトイレに来てしまったが、何も感じない。空気の動きがないし、ひんやりとしていて気分が悪くなってきた。こんな場面を誰かに見られたくもないし、帰るか……。

僕がふと顔をあげると、誰かが僕を見つめていた。

鏡に映る誰かは、僕を睨みつけていて黙りこくっていた。

気色の悪い誰かの顔。始めてみた人間。気づくことのなかったもう一つの現象。

あいた口が塞がらなかった。鏡の中の人間も同じ動作をした。

深く痩せこけた鏡の中の自分が僕を見ていた。

もうすぐまゆに会える。そう思っただけでうきうきした気分だったはずなのに、どうして僕はこんなに気色悪い顔をしているのだろう。天井から降り注ぐ蛍光灯の光が僕の顔の凹凸を際立たせる。正直、最初は自分だと思わなかった。どこかの誰かが隣にいるのかと思った。誰もが僕を心配する理由を悟った。これはまるで僕じゃない。いつの間にこんな顔を作っていたのだろうか。おそらくファーストフード店で僕が起こされなかったのはこれが原因だろう。店員さんが心配そうな顔を向けていたのは、僕のせいだったんだ。



.....  
「お、戻ってきたか」

大樹は窓から世界を見下ろしていたが僕が入ってくると同時にこちらを向いた。

何を思ったのか。僕は病室に舞い戻っていた。

そこには偽物のまゆしかいなかったはずなのに。

そう信じていたはずなのに。

「気分はどうだ？」

最悪だ。どうしてくれる。

「じゃあ、まゆに暖めてもらおうぜ」

僕は顔をあげた。自分の言ってる意味を理解しているのだろうか。

「まゆに会いたいだろ？」

もちろんだ。僕が迎えに行くんだ。

「じゃあ、俺を同じことしてみろよ」

？

大樹が僕と対峙した。二メートルほど間をあけて向かい合っていた。

「いいか？ 俺の真似をするんだ。きつとまゆに会えるから」

.....  
分かったよ。

すると笑顔になった大樹は何も言わずに動き始めた。

大樹は、ポケットから片手を出した。その手を見つめてから強く握った。そしてそれを胸にまで持っていき、数秒してからゆっくりと目をつぶった。

そのまま微動だにしない。

何をやっているのか。僕にそれをやれというのか。

わけがわからないまま、大樹と同じ行動を試してみた。

右手を胸のあたりにまで上げて、手のひらを見つめた。それから強く握りしめ左胸にあてた。大樹が全く動かないのを確認してから、僕は目をつぶった。

我ながら気持ち悪い行動だと思う。心臓の鼓動をひしひしと感じ

た。

真つ暗闇の視界に、突如映像が映る。

なんだ？ なんなんだ？

僕は唇をかんだ。後ろから誰かに引つ張られるような感覚とともに、誰かの声が聞こえた。

## 回想（前書き）

次章で完結します。

## 回想

「……………ねえ、私と付き合ってくれないかな？」

夜。家の敷地に入ろうとしたとき、突然後ろから声がかかった。振り返って見えた女の子が僕のほうを見て微笑んでいたから、茫然としていた。周囲に人がいなかったのでもう考えても僕だった。見ず知らずの僕に告白してきたのは、ピンク色のマフラーを首に巻いて、かわいらしい声を発した妖精みたいな女の子。

「ねえ、いいでしょ？」

いいでしょってなに？

「クリスマスの夜に愛の告白！ 素敵でしょ？」

さ、さあ、どうかな？

「えー、隼人君はそう思わないのー？」

い、いやあのね…………。

笑顔と明るい性格に押されっぱなしの僕は慌てふためくことしかできない。

あれ？ なんで僕の名前知ってんのさ？

「うーんとね、隼人君と私はね、友達の友達なの」

つまり他人ってこと？

「ううん、今日から恋人だよ！」

どんな言い訳をしても女の子は僕から目線を離そうとしなかった。寒かったから早く家に入りたかったけど、この女の子を何とかしないとできそうもなかったから困っていた。

「何か困っていることでもあるの？ 顔色悪いよ？」

君のせいだよ。

「そんなあ、かわいいだなんて言うてくれるのは嬉しいけど私たちはまだ…………」

ちよつと、勝手に話し進めないでくれないかな？

女の子は両手で僕の手を握ってきた。

「ねえ、お願い……」

僕は手袋をしていた。かなり分厚い奴だったから握られている感覚は薄かった。

無理やりに手を丸め込まれ、女の子はそれを包み込んだ。

「お願い……」

丸くなった手に小さな違和感。女の子が僕から手を離れたからそっと開いてみる。

自然と丸まった紙切れ、ノートの切れ端のようなくしゃくしゃな紙が手の中にあつた。

女の子が無言でうなづく。

僕は親指を上手く使ってそれを開いた。

『昔の彼氏から逃げたい。話を合わせて』

丸めの書体でそう記されていた。

もう一度、僕は拳を作つてその手をポケットにしまった。

女の子を見つめた。真摯な表情を作る小さな瞳が、僕の目に映つた。

そして二度目の告白。

「ねえ、私と付き合ってくれないかな？」

女の子の瞳が潤む。こんな僕がうなづくだけで誰かを救えるのなら、という人助けの気持ちで僕は言った。

「いいよ、よろしく」

わぁいと飛び跳ねそうな女の子はもう一つ、今度は堂々と四つ折りにされた紙切れを渡してきた。

そこには携帯番号とメールアドレスと、名前が書かれていた。

佐々野まゆ。

それが女の子の本名だった。

まゆは突風のように消え去ってしまった。手を振りながら何度も振り返り、笑顔を見せてくれた。悩みなんてないようにも思えたけど、詳細はメールで聞けば十分だ。

ふと誰かの目線を感じて反対の通りに顔を向けた。

誰かに覗かれている気がしたのだ。  
でも僕の後ろには誰もいないくて、首を掻いてから家に入った。  
ただいま。

一言だけ、家族に挨拶をして。

まゆは僕に言った。

『友達の友達』

それが誰かわからなくてメールで聞いたただしたが、はぐらかすばかりで答えてくれない。どこに遊びに行こうか？ と本物の恋人を演じていた。だから僕は片っ端から知り合いにメールを送り、探ってみた。

数日後、僕が部屋でまゆからのメールに返信を打っていると、電話がかかってきた。

大樹からだった。

「まゆは俺の彼女だったんだ」

携帯を耳に近づけると、いきなりそう切り出してきた。  
お前だったのか。

「ああ、愛想尽かされちゃったみたいでな……」

あまり落ち込んでいる声じゃないが、それを信じて話を続けた。  
なあ、なんか彼女に悪いことでもしたのか？

「いや、なにも。どうしてそう思った？」

伝えていいものか迷ったが、

彼氏と別れたいから付き合うふりをしてくれって言われたぞ？

震えながらも口にしてしまった。

「俺のときと同じだな」

かすれた声でそう言った。

どういうことだ？

「それがまゆの手なんだよ。俺に告白してきたときもそんな感じだったよ」

そうだったのか。

僕は安堵した。暴力でも受けているのかと思っていたから。

「まあ、現に俺はふられた。まゆをよろしくな」

ああ、了解。

話題がなくなったので携帯を耳から離したが……、

いや違うだろ！ え、なに？ 本当にまゆと付き合わなくちゃいけないのか？

「え、嫌なのか？」

嫌だよ。そんな付き合い始めがあつてたまるか！

「合コンで会った人と交際するのと何ら変わりないだろ。付き合い合っちゃえよ」

どうして僕が。

「まゆからしつこくメール来てるんじゃないのか？ ちゃんと答えれやれよ」

その指摘は正しかった。デートをしたがつているまゆからのメールをうやむやにしていた。

「ちゃんとメールすればすぐに来てくれるぞ。もちろん今からでもな。それだけ好きなんだろうな」

どうすればいいか悩んでいた。彼女を作る絶好のチャンスではあるがどうも信用ならない。普通に告白してくればいいのに、嘘まですべて近づいてきたのが怪しい。

「まゆ言つてたぞ。好きになる人はいつも遠くにいる。だからなんとしても私から近づいてやるんだってな」

……それでお前は犠牲になつたんだろう。

「結果論だろ。もしかしたらお前とは一生いるかもしれないぞ？」

悪いことは言わないから付き合い合つてやれと、大樹はきっぱりと言つた。

大樹はいいやつだと思う。だけど一つだけ信用ならない部分がある。いつでも女の子優先で予定が重なると絶対に女の子が多いほうを選択する。それを思い出したとき、僕の脳内はある一つの推論で埋め尽くされた。

お前、何人もの女の子と付き合っていたんだろ。それを隠すためにできるだけ多くの女の子がいる予定をいつも選んでいた。

「ど、どうしたんだお前……？」

とにかく女の子が好きだったお前は困っていた。最終的に一人の女の子に決めなければならぬ。そう思いついて、まゆとは別れることにした。

「お、おい」

お前はまゆに暴力をふるったんだ。まゆはお前のことが大好きだったのに、そんな気持ち踏みにじった。心細くなったまゆは、たまたま僕を見つけて嘘の手紙をくれた。

「違う！ 深読みすぎだ！」

ふざけんな！ だったらどうしてそう簡単に付き合っていた人を見捨てられる！ 裏があるからだろうが！ 僕が告白されたとき背後に気配を感じたぞ。あれお前だろ？

「ち、違う、落ち着け！ 俺はただ……」

もついい、学校でも話しかけんな。

そして僕は携帯の電源まで切ってしまった。

まゆと真剣に付き合うつもりはなかった。でもしつこくメールをしてくるからまゆの心を癒す意味で数回付き合ってからきちんと事情を話して別れようと思った。

でも、僕にそんな勇氣はなかった。

まゆに呼び出されて一緒に行動して癒されているのは僕のほうだった。絶えることのない笑顔は何度見ても飽きなかった。いつも駅前で待ち合わせして「どこいこうか」と笑ってくれる。そばにいてだけで僕は嬉しかったんだろう。戸惑いながらも僕はその笑顔に引き込まれていったのだ。

それなのにまゆは僕の手を握ろうとはしなかった。

まゆなりの順序があつたのだ。僕には分からなかったが一年が経過するまで僕の手は冷たいままだった。

蘇る思い出。数多の軌跡。



ねえ、私と付き合ってくれないかな？

えへへ、楽しいね！

あ、あっちにかわいいぬいぐるみがあるよ！

ねむいゝ、肩貸してゝ。

来週はどこ行こうか？ 花火大会とかどうかな？

あした、私の誕生日だから、忘れないようにね！

## 真実

「……目を開ける」

低い声が室内に響いた。それが耳に入り、僕はゆっくりとまぶたをあげた。

「まゆは見えたか？」

僕は声を出せないでいた。涙が出そうだったがそれが原因じゃない。目前に佇んでいる人物の瞳に滲んでいるものを目にして、まばたきすら忘却していた。

「なあ、見えたか？」

大樹の手は既に胸から離れ、力なく肩からぶら下がっていた。

「み、見えたのかよ……？」

もしかしてお前、泣いてるのか？

「じよ、冗談言うなよ。泣いてねえよ……」

その否定の効力は弱すぎた。

「泣いてねえよ……泣きたくねえよ……」

歯を食いしばっていたが、表情はこわばっていた。

こつちも悲しくなってくるほどつらそうな顔。

そうか、お前もまゆを見ていたのか。

「俺はな、突然別れを切り出されて一日中泣いてたんだよ！　ようやく泣きやんだのに今更また涙でてきやがって、クソっ！」

大樹は、片足を振り上げ床にたたきつけた。

「俺はな、まゆを追う気にならなかったんだよ！　そんな気の小さい男なんだよ！」

大樹は、女の子に対しては僕のような人間だった。

「俺はな！　お前ならまゆを任せてもいいって、本気で思ってたんだよ！」

ひゅつと何かが宙を舞った。放物線を描いて僕のもとにやってきた何かは、とても古めかしい機械だった。

「再生してみろよ」

僕はテープレコーダーの再生ボタンを押した。

ザーッと雑音がしばらく続いた後、聞こえてきたかわいらしい声。  
まゆの声。

『大樹君。えと、ちょっといいかな？　口で言いづらいから留守電に残すね。……ほ、ほかに好きな人ができちゃったの。……隼人君？　っていうんだけど……知ってるよね。本当にごめんなさい。一度も喋ったことないけど、でも、でも、もうあの人しか考えられない……。私、ひどい女の子だね。勝手に好きになって勝手に見捨てようとして……。いいよ、恨んでくれて。憎んでくれて。全部私が悪いって分かってる。たとえ殺されても文句言わないくらい悪いことしてるって思ってる。でも、でもね。私後悔したくないの。最後まで人を追いかけたいの。好きな人に好きって伝えたい。それだけなの。……ごめんなさい。で、でも！　もし一時の勘違いだったなら。』

だから明日……明日……会いたいんだけど、いいかな？　夕方くらいに……いつもの場所で、待ってるわ。大樹君なら私を止められるかもしれない。別れたくないなら私を、とめてみて……。聞いてくれてありがとう。じゃあね』

長い告白のあと、雑音が続き自動的に巻き戻された。

なんだこれは……なんなんだこの音声は。

「お前が昨日の花火大会で聞いたのはこのテープの切り貼りだよ。携帯はまゆの両親に借りたやつだ。ごめんな」

少しうつむく大樹。

録音っぽいのは、お前が待ち合わせの駅に現れたとき薄々感じてたけどな。

「そうか。いや、そうだよな」

あははは、ときごちなく大樹は笑った。

「俺はこの録音を聞いた次の日、家から出なかった」

え、お前行かなかったのか？

「ああ、俺がかわいい子に旅をさせたのがいけないんだ。それに、繰り返しになるがお前なら安心して任せられると思った」

大樹の涙は枯れていた。涙の跡がうつすらと見える。目線を僕によこした後、告げた。

「もう分かったろ？ まゆはな、俺らの心の中にいるんだよ。いつまでもな」

電話口で聞くふざけた声じゃない。真剣な表情で僕に訴える。

「それくらい分かるだろ？ いつまで逃げてんだよお前は」

つかつかと僕に近づいて胸ぐらを掴み上げる。

「いい加減目を覚ませ！ まゆは見えないだけでお前の中にいる！俺の中にもいる！ それでいいだろう！ もうまゆを探して放浪するのはやめろ！」

な、なにを……。

「お前の中でまゆは生きてる！ 永遠に生き続ける！ 見えないだけでどんなときも一緒だ！ だからもう逃げんな！」

この大声はきつと廊下に響いている。

「ここのベッドに横たわってったのは何物でもないまゆなんだ！」

大樹が片手でベッドを指さして叫んでいた。

「お前のその手、今あったかいだろ？ 誰が暖めてくれたか分からないとは言わせねえぞ！」

僕を睨みつけてくるその目からは再びの涙。そしてシャツを掴んでいる手は震えていた。

僕はそのとき、自分の手が赤くなっていることに気づいた。

心の中で僕を応援しているまゆが暖めてくれた。

たくさんさんの思い出が心にはあって、僕を前に進めようとした。初めから、まゆを探す必要なんてなかったんだ。

ここに、この中にずっといたんだから。

すべてに気づいた僕は床に膝をついた。

こみ上げるものを必死で抑えようとして両手は強く強く握られる。目頭が熱くなって、涙腺がはじけた。

「うわあああああああああああああ！」

室内に響いたのは僕の叫び声だった。

何事かと病室に駆け込んできた看護婦さんがしゃがんで僕の背中をさすってくれる。僕の目の前では大樹が腕で涙をぬぐっていた。逃げ続ける僕を見て余計につらくなってしまったのだ。大樹もこの現実から逃げたかったはずなのに、頑張つて耐えてきた。僕の気持ちに気づいてくれていたからこそまで手をかけて僕に現実を教えてくれたんだ。この世界で唯一僕の気持ちを理解できる大樹だからこそ僕を救えた。

耳に手を当ててうずくまった。寒くもないのに震えあがる僕の体。現実が頭に流れ込んできてどうしようもなくなった。明日が見えなくなつたわけじゃない。だけど悲しみがとめどなく押し寄せてきて身動きが取れなかった。

僕は、目から鼻から口から汚い体液を撒き散らして泣き叫んだ。迷惑をよそに大声で時を忘れて喚いていた。

……………昨日までの僕。

もし明日、君が死んでしまったら。

僕はそれを信じずに君を探す旅に出る。思い出の場所を何回も訪れて君を求めて歩き続ける。くじけそうになつても諦めることなく過去を思い返してどこまでも足を運ぶ。必ず見つけてやると豪語して誰も信じないで逃げ続ける。そんな僕を誰も気にかけてくれなくなつたそのとき、僕は命を落としてしまうだろう。

……………今日からの僕。

もし明日、君が死んでしまったら。

すべてを受け止めて前に進み始める。君は消えてしまったんじゃ

ない。僕の視界に入らなくなっただけで、ほら、胸に手を当ててみれば楽しかった思い出が蘇る。いつだって心の中にいる君に会える。だから僕は明日から涙を流さない。胸に秘めた思いを抱きしめて果てない人生を、歩もう。

家に帰ってみると、一通の年賀状が届いていた。

今年もよろしくねと、上のほうにまゆらしい文字で書かれていて向日葵の絵が添えてあった。

大樹に教えられたとおり、僕は右手を握りしめて胸に手を当てる。そして深呼吸とともに目をつぶった。

当てた手が次第に熱を帯び、申し分ない幸せで満ち溢れていく。

さあ、心の中の君に伝えよう。

今年もよろしく。

もちろん来年も再来年もその先もずっと、忘れないようにね。

## 真実（後書き）

ここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございます。  
ではまたどこかで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9536/>

---

もし明日、君が死んでしまったら

2010年10月8日14時36分発行